

（6）設計段階における確認事項(自然域、中間域、都市域共通)

5) 土工設計における確認事項

○ 土工設計における景観的ポイント

土工設計において、法面自体のデザインを検討する前に、線形の微調整などにより、法面の回避、縮小化や既存樹木の保全、表土の活用などの検討を加える必要がある。

また、法面が発生する箇所では、ラウンディング、グレーディング（緩勾配化）、元谷造成などのアースデザインの手法を用いて、自然地形とのスムーズな連続性を確保することが望ましい。

○ 土工設計における確認事項

1. 既存樹木、樹木は保全されているか

【解説】

造成によって出現する法面などでは、安定した植生が定着して、自然が回復するには時間がかかる。その意味では、土工設計にあたっては、詳細に地形との取り合いを検討し、地域的に既に安定している植生ないしは樹木などを保全することを考える。

2 既存樹木の移植を検討したか

【解説】

造成によって伐採される樹木についても、それまでに生育してきた時間的な蓄積は貴重であり、景観的に効果的な大径木でなくとも、資源保全の意味合いで、移植などを考えておくことが望ましい。

3. 表土の活用を検討したか

【解説】

自然域に出現する道路の切土、盛土法面は、自ら安定的に自然の回復を図る原動力となる表土の活用を検討する。

4. 自然植生の回復に配慮したか

【解説】

法面の緩勾配化やラウンディングにより、周辺からの自生種が侵入しやすくなり、自然植生の回復がしやすくなる。

5. 自生種による法面の樹林化を検討したか

【解説】

自然域に出現する道路の切土、盛土法面は「周辺の自然植生」をモデルに自生種による樹林化を図る。

6. 周辺地形との連続性は確保されているか

【解説】

法面が発生する箇所では、グレーディング（緩勾配化）、ラウンディング、元谷造成などのアースデザインの手法を用い、周辺の自然地形とのスムーズな連続性を確保することが望ましい。以下、それぞれの手法について、概要を示す。

グレーディング（緩勾配化）

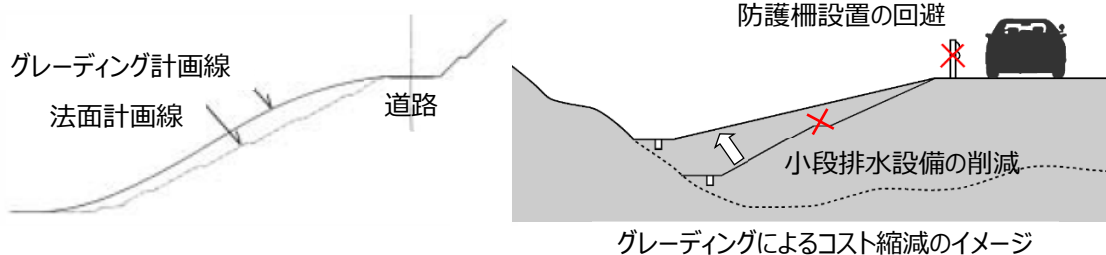
法面は地形状況に応じて緩勾配化することで人工的な印象を緩和するとともに、走行の安全に寄与し、かつ良質な植生の回復を図る。

① 切土法面のグレーディング

切土法面のグレーディングは視界が広がることで閉鎖感から開放され、走行快適性が増す。また、景観面での効果だけではなく、視距が長くなることでの安全性向上やドライバーの疲労軽減を図ることに有効である。したがって、緩勾配切土は長期的な視点で良好な道路環境を形成するために積極的に検討することが望ましい。

② 盛土法面のグレーディング

盛土法面についても緩勾配化は道路の存在感を低減し、特に外部景観の向上に寄与する。また、路外への逸脱時の安全性が向上するとともに、防護柵の設置が不要となるため、開放的であり内部景観の向上にも寄与する。さらに、緩勾配化により、小段の排水が不要になるなどさらなるコスト縮減に寄与する場合もある。

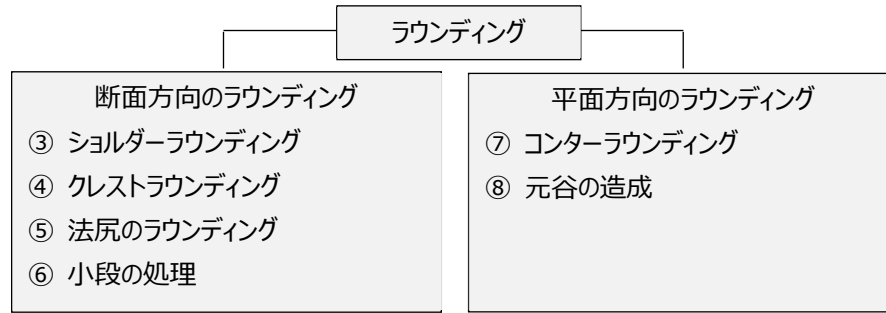


出典：* 2 3

ラウンディング

切土及び盛土法面は、平面、横断方向にラウンディング（コンター、ショルダー、クレスト、のり尻）を施し、周辺の地形との連続性を確保し馴染ませる。

ラウンディングには、断面的な土工処理としてショルダーラウンディング、クレストラウンディング、法尻のラウンディングがあり、等高線に沿った平面的な土工処理としてコンターラウンディング、尾根・谷の創出などがある。必要であればこれらを組み合わせて、周辺地形と調和する土工処理を行う。



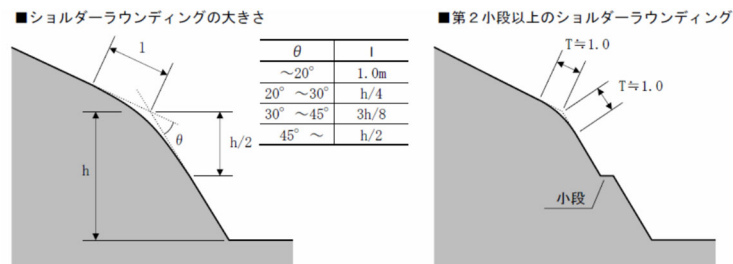
ラウンディングのパターン

出典：* 2 3

③ ショルダーラウンディング

ショルダーラウンディングとは、法面と地山が鈍角に交わる場合、浸食防止と地山とのスムーズな連続、植生の定着を図る程度の比較的規模の小さいラウンディングを言う。

ラウンディングの大きさは、1 段の法面の場合は法面勾配と地山勾配との差に応じて下表の通り変化させるのがよい。また第 2 小段以上の法肩については、ドライバーの目線よりも高いことによる景観的な影響が少ないことから、法肩の浸食を防ぐ程度（1 m 幅）のラウンディングを行うことを基本とする。



ショルダーラウンディング

出典：* 2 3

④ クレストラウンディング

クレストラウンディングとは、切土法面で尖った法肩が形成される場合に、法肩部へ特別に大きなラウンディングを行うことを言う。

クレストラウンディングの大きさ内接円半径で 10 m 以上（法面勾配が 1 : 1.2、背面の斜面勾配 1.2 の場合）を目安とし、弧の長さを最低 5 m 以上確保することが望ましい。



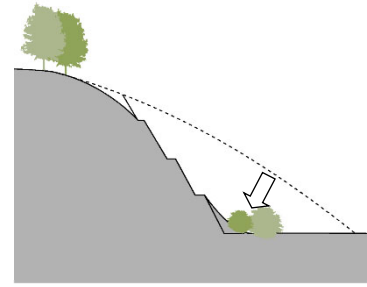
クレストラウンディング

出典：* 2 3

⑤ 法尻のラウンディング

小規模切土面など、法面のセットバック時に切高が大幅に増加しない場合は、法尻に形成される直線の緩和を目的として、法尻のラウンディングの導入を検討する。

法尻の勾配を緩くし、法面と道路面とで構成される直線的な角を視覚的に緩和する。切土法面は、低い位置ほど安定勾配が急で切り立った印象となるのが一般で、違和感を生じやすい。



法尻ラウンディング 出典：* 2 3

法尻のラウンディングは地形改変規模が大きくなる場合には、自然環境や経済性への影響から導入は難しい。しかしながら小規模なものにあっては、わずかな土工処理で道路面と切土面が形成する角の直線的な違和感を視覚的に緩和するとともに、逸脱車両の法面への衝撃緩和にも有効な措置である。



小段の処理 出典：* 2 3

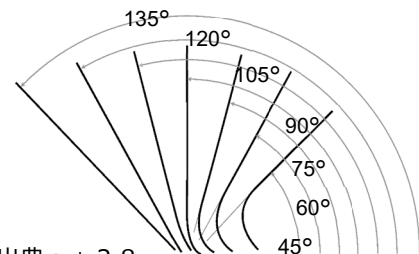
⑥ 小段の処理

小段は人工的な印象が強いため、上部から維持管理が可能な最上部の小段など、実用上必要の低い小段の削減を図るとともに、広幅小段では法肩部のラウンディングを行うこととする。小段は、直線で構成されることから法面の人工的な印象を強調しやすく、景観的な配慮が求められる。一般的には、標準定規で画一的に設計される場合が多いが、地山の位置とほとんど変わらない最上部の小段などメンテナンスや工学上問題がなければ、極力小段を削減することが望ましい。

⑦ コンターラウンディング

コンターラウンディングとは、法面端部などにおける等高線に沿った平面的なラウンディングを言う。盛土や橋梁と切土との境界部においては、切土端部が遠方からよく視認されるため、周辺地形に馴染ませることが効果的である。

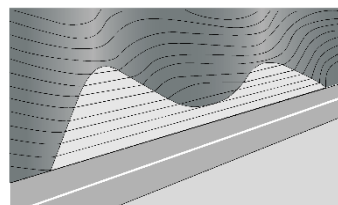
切土法面の端部は、内接円半径 5m のコンターラウンディングにより地山とのすりつけを行うことを基本とする。なお交角の変化が非常に大きく、すりつけ部に違和感が生じる場合には、部分的に内接円半径を大きくするなどして調整を行う。



コンターラウンディング 出典：* 2 8

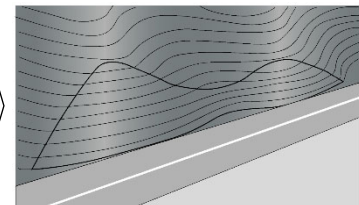
元谷の造成

切土面が連続している場合には、地山との関係性を考慮した谷を造成することによって切土面の違和感を解消することが有効である。このような処理は、雨水が谷線の1か所に集中することによる水道（みずみち）形成の回避や多様な自然環境を形成する上でも有効な手法である。



近接する尾根谷を連続して頂部からカットした場合になりやすい代表的な形状。

内部景観では下段部の法面が連続しているため違和感はないが、外部景観では尾根谷地形がよく認識できるため不連続地形に違和感を強く感じる。



地山及び周辺の谷線の流れを基調とし、法面に谷を創出することで単一の法面が与える人工感を軽減できる。

また、創出した谷部に植栽を施すことで威圧感を与える長い法面を分断できる。

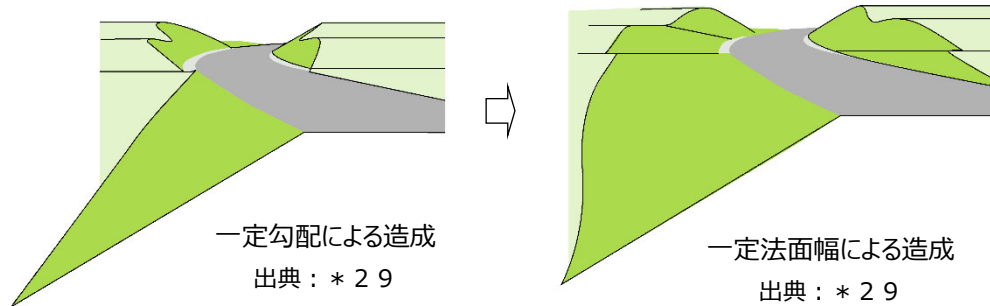
元谷の造成 出典：* 2 3

7. 切土盛土法面の連続性は確保されているか

【解説】

土工のデザインは、切土と盛土に区別してそれぞれ個別に取り扱うのではなく、相互のコンビネーションの出来映えが道路景観の美しさを決定づけることに留意する。

特に、小規模な切土と盛土が連続する地形条件では、一定勾配による造成よりも、一定法面幅による連続した造成のほうが景観的に望ましい。このような地形の造成は、法面に明確な水道（みずみち）をつくらないことから、法面の保護にも有効である。



6) 擁壁設計における確認事項

○ 擁壁設計における景観的ポイント

擁壁の整備にあたっては、面の全体形、表面の見え方、汚れ、存在感の緩和に配慮し、コンクリート面を美しく見せることに努めるものとする。また、橋梁や函渠などの構造物が隣接する場合には、それらと一体的に取り扱う。

○ 擁壁設計における確認事項

8. 自然景観との馴染みに配慮したか

【解説】

擁壁がもつ冷たい印象や圧迫感を和らげ、周辺環境に馴染むようにするために、植栽を併せて計画することが望ましい。擁壁の位置をセットバックして前面に植栽スペースを設け、壁面を部分的に覆うと大きな効果が得られる。また、擁壁天端に植栽を施すことやツタ類による壁面の被覆などでも壁面の印象を和らげることができる。

擁壁の端末部は山側に巻き込むとともに、盛りこぼしや植栽を施すことで、地形との柔らかな接続を心がける。



植栽による擁壁の修景

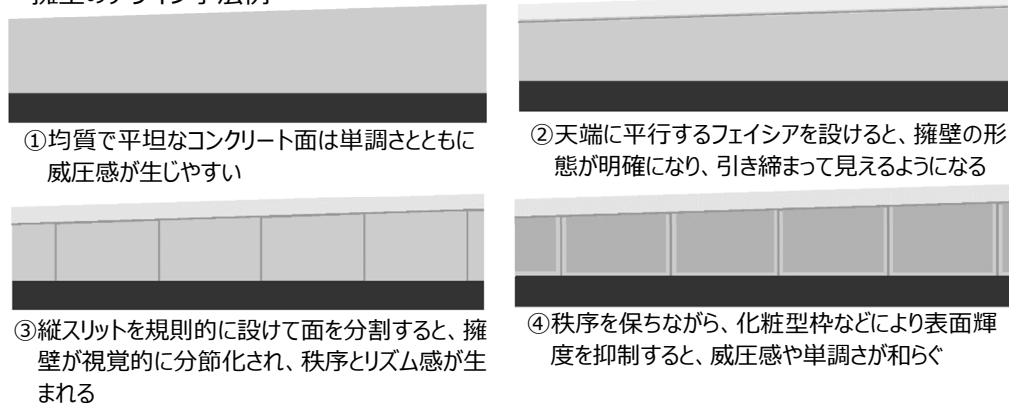
出典：* 2 3

9. 擁壁の威圧感、単調さの緩和に配慮したか

【解説】

擁壁は大きなコンクリート面が露出する構造物があるため、威圧感や単調さを回避することが重要である。高さや延長、見られる頻度や距離などを勘案した上で、視覚的な分節化、秩序の創出、表面輝度の低減を目的とした修景を施すものとする。具体的には、面木によるスリットや化粧型枠を用いて抽象的なテクスチャーを付与することが有効な手法である。

擁壁のデザイン手法例



擁壁のデザイン手法例

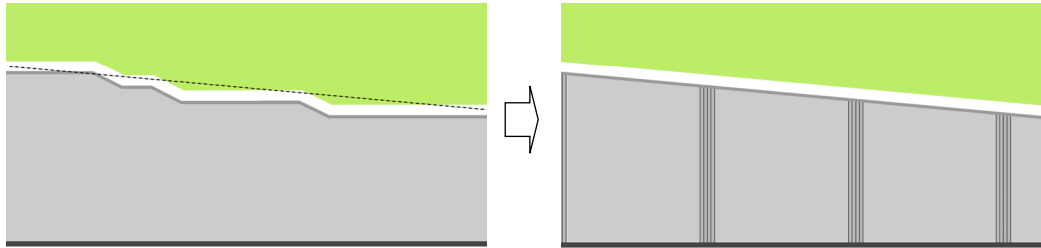
出典：* 2 3

10. 連続性に配慮した擁壁の全体形状としたか

【解説】

地山の形状や使用材料の特性に合わせた結果、擁壁の天端が多数の折れ線で構成されている不連続な線を描き、壁面全体の美観を大きく損なうことがある。

このため、擁壁の位置や土工形状を工夫して高さを調整し、壁面の全体形を整えなければならぬ。整った形状をさらに引き締めるためにはボーダー（縁取り）を設けると効果的である。



擁壁の天端に不連続な段差が生じており、無秩序な不自然な印象を与えている。

不連続な段差が生じやすい天端を直線で構成することで、擁壁の全体形状を整える。さらに、天端にボーダーを設けることで、全体形状のシンプルさを強調する。

連続性に配慮した擁壁の全体形状例

出典：* 2 3

7) トンネル、函渠、覆道設計における確認事項

○ トンネル、函渠、覆道設計における景観的ポイント

トンネルの整備にあたっては、圧迫感や閉鎖感を軽減するとともに、道路が周辺環境と共存している事実を視覚的に示すものとする。

函渠の整備にあたっては、土工のおさまり、開口部の造形、付属物の配置に配慮し、シンプルに見える外観を目指す。

○ トンネル、函渠、覆道設計における確認事項

11. 自然景観との調和に配慮したか（坑口周辺）

【解説】

トンネル坑口周辺の景観を阻害しないために、電気設備や標識などの位置や形状が煩雑に見えないような配慮が求められる。

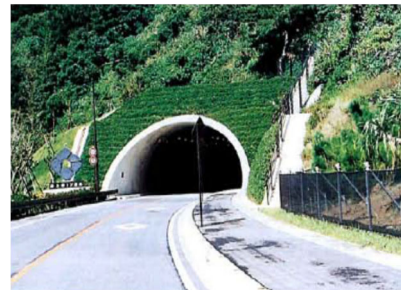
12. 坑内進入時の心理的抵抗の軽減に配慮したか

【解説】

トンネル坑門は、トンネルから受ける重圧感を軽減してドライバーの進入を促す役割を担う。このことに対する配慮が不十分な場合は心理的な抵抗感が生まれて渋滞や事故を誘発することなど、交通安全性に悪影響を及ぼすことがある。具体的には、坑内との明度差が大きい面壁型坑門でなく、構造物の露出面積の少ない突出型坑門を選択するなどが考えられる。



面壁型坑門
出典：* 3 0



突出型坑門
新与那トンネル（国頭村）出典：* 2 0

覆道の開口部は、トンネル坑門と同様に運転者が最も注視する箇所であり、基本的な配慮事項はトンネル坑門と同様である。覆道本体の断面形状が反映されることが多いため、左右非対称となる形状がいびつで不安定な形態に見えないように、部分的な張り出しやテクスチャー（表面の肌合い）などにも配慮することで、進入しやすい整ったしつらえにする。



屋根を水平に張出し、支柱部分を視覚的に分離することにより安定感のある形状としている。

タイル貼りにより坑口部分の日差しの反射輝度を落とし、抵抗感を軽減している

坑口部分の修景例

出典：* 2 6



アーチ型に突出した坑口形状により坑内進入時の心理的抵抗を軽減し、覆道内部の傾斜した支柱により開放的な空間を構成している

アーチ型の坑口形状例（スイス）

出典：* 3 1（伊藤清忠 景観デザイン・フォトライブラリー画像提供：土木学会土木図書館）

13. 坑内の快適性に配慮したか

【解説】

トンネル坑内は、広く明るく清潔であり、線形が予測できることが快適性の向上につながる。

トンネル断面は容易に広げることができないが、照明、換気などの設備設計と一体的に検討し、汚れにくく、また安全運転に寄与するように、広く、明るく見せることが求められる。



視野誘導するアクセント照明
と照明パネル

加久藤トンネル（宮崎県）

出典：* 3 2



走行位置の目安となるランドマーク照明

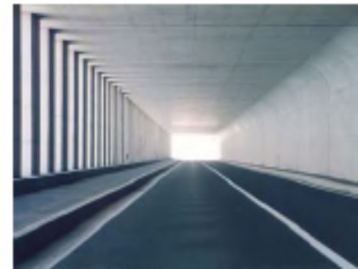
出典：* 3 2

14. 内部景観の見通し、見晴らしに配慮したか

【解説】

覆道の内部景観は左右で大きく異なるため、道路線形により見え方が大きく変化する。谷側は可能な限り開放的にすることが望ましく、柱を細くすること、整然と配置すること、シンプルに見える形状にすることに注意を払う必要がある。

また、それらは外部景観にも大きく影響するため、外部から視認される場合には十分な検証を行うものとする。



ハンチの無い柱が整然と並び、シンプルで
良好な内部景観が形成されている。

ハンチの無い覆道の柱

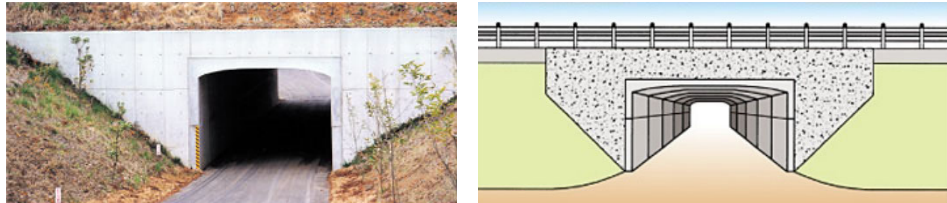
出典：* 2 3

15. 土工とのおさまりに配慮したか

【解説】

函渠の景観においては構造物と土工とのおさまりが重要なポイントとなる。本線に平行するウイングと積みブロックとを組み合わせることが最も多いが、これは異なる工種が混在することから景観を乱す要因になりやすい。

重要な視点場がある場合には、本線に平行する擁壁と盛りこぼしの組み合わせや、本線に直交するウイング及び擁壁を検討することで、土工との良好なおさまりを目指す。



本線に平行する擁壁と盛りこぼしの組み合わせ例
出典：* 3 3

16. 開口部の煩雑感に配慮したか

【解説】

函渠の開口部の形状は、構造物の印象を決定する。可能な限りハンチ（接合部の強度補強）を省略するか、必要となる場合は、大きなアール繋ぐ、開口部に段差を設けるなどの造形的な配慮を行う。また、汚れやテクスチャーなどに配慮した表面処理を行う。



ハンチの省略
出典：* 2 3



アーチ型の開口部
出典：* 3 4

17. 落下物防止柵などの付属物の形状、色彩に配慮したか

【解説】

函渠の周辺には、落下物防止柵や立入防止柵が必要になることが多い。これらの付属物は当初から考慮し、目立たない配置や形状、色彩とすることが重要である。

18. 前後の擁壁との連続性に配慮したか

【解説】

覆道の前後で連続する擁壁など、同時に視認される構造物群は一体的に検討する。同一区間において外観が異なる様々な形式の覆道が混在することは好ましくない。坑口の形状や材料を含めて、できる限り統一を図る。

8) 橋梁、歩道橋、跨道橋設計における確認事項

○ 橋梁、歩道橋、跨道橋設計における景観的ポイント

橋梁の構造形式の選定にあたっては、まず、そのもの自体の美しさに配慮することが重要である。また、周辺景観の中でのおさまりを十分に検討する必要があり、原則として周辺景観に溶け込むデザインとすることが望ましい。

すなわち、橋梁は、構造物の骨組み、構造物の細部、構造物を含む全体の空間を統合した視点からデザインを進めていく必要がある。

○ 橋梁、歩道橋、跨道橋設計における確認事項

19. 経済性ととも、周辺環境に配慮し構造形式を選定したか

【解説】

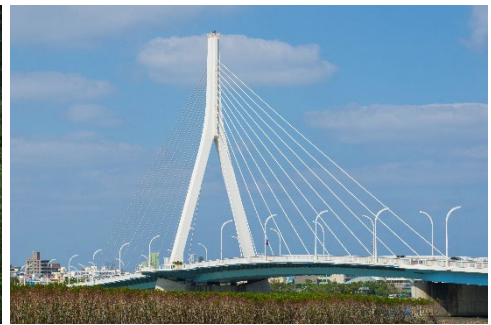
橋梁の構造形式の選定にあたっては、橋梁そのものの美しさを求めるとともに、周辺の地形や土地利用などの調和を図る。構造形式の比較検討を行う場合、次の点に留意する。

① 力学的な明快さ

橋梁デザインは、見る人に不安定感をいだかせないように、構造物に作用する力の大きさと流れを明確に表現し、視覚的な安定感が得られる構造形式にすることが望ましい。（構造物内部の力の大きさ及び伝達方向を明確に表現している構造形式は、形状がすっきりしており、それ自体に構造美を持っている。）



サルギナトーベル橋（スイス）
出典：* 3 1（伊藤清忠 景観デザイン・フォト
ライブラリー画像提供：土木学会土木図書館）



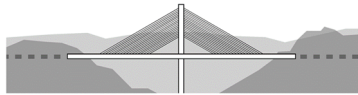
とよみ大橋（豊見城市）
出典：* 1

② 視点及び視点場の特性

橋梁デザインにあたっては、視点、視点場の特性を的確に掴む必要がある。例えば、遠景の視点が多い場合は、構造物全体の形状（シルエット）が景観デザインの主題となり、近景の視点が多い場合は、部材の形状が主題となる。

③ 周辺自然地形との関係

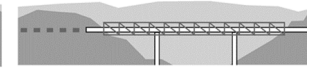
橋梁は、周辺の地形が生み出す空間スケールなどに応じた構造形式を採用する。



桁の上部に構造物がくる形式はランドマークになりやすい反面、背景の稜線を切る場合には、風景に馴染みにくくなる。



水平垂直の直線や滑らかな曲線によるシンプルに構られた構造形式は、様々な風景に融和しやすい。



トラスやアーチなどの透過性のある構造形式は、風景に馴染みやすい一方で強い秩序感を必要とする。

周辺自然地形との関係

出典：* 2 3

④ 鋼、コンクリートの材料の特性

構造物の材料が持つイメージは、非常に強力なので、構造デザインに際しては、材料の持つ本質的な特性を立地条件に活かすことも考慮に入れなければならない。例えば、一般に、コンクリートは穏やかで、重厚、地味などの印象を与える。土や木などの自然物と無理なく馴染む。鋼は冷たく（クール）、鋭い（シャープ）、軽快（スレンダー）、ややもすると機械的などの印象を与え、機能的、都市的イメージと合致する。

歩道橋などの小規模な橋梁の構造選定では、経済性や構造的とともに、素材の持つ景観的特性を配慮する場合がある。

⑤ 景観資源に与える影響

自然域においては、周辺の地形や水面、緑が織りなす風景、中間域においては、人々の活動によって生まれた農村風景や田園風景が景観資源となる。橋梁の構造デザインでは、施工方法や工事道路などによる影響を勘案しつつ、周辺の景観資源と調和した風景を目指す。

20. 地形改変の抑制などに配慮して下部工の位置を決めたか

【解説】

橋梁下部工の設置位置の決定に際しては、地形改変を抑制し、既存の景観資源の保全に配慮する。

21. ドライバーに対する視覚的な影響に配慮し、下部工の位置を検討したか

【解説】

高架下の交差道路からの下部工の見え方を視覚的に検証し、ドライバーに対する影響を考慮する。

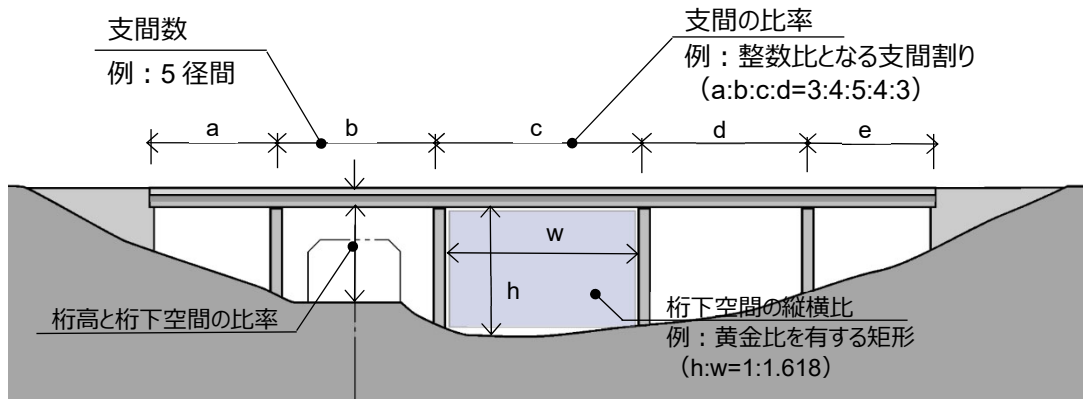
- ① 跨道橋などで、複数、近接して架橋される場合は、位置の調整と集約して数を減らす。
- ② 道路建設によって生じる法面の縮小化などと併せて検討を行う。

22. 上下部工の視覚的なバランスに配慮し支間割を決めたか

【解説】

支間割などの決定に際しては、上下部工の視覚的なバランスに配慮する。具体的には、構造的或いは経済を基本としながらも、立地特性を勘案しながらも以下の観点からの検証を行う。

- ① 支間の比率：力学的必然性から生まれる比率や、黄金比や整数比などを一つの基準として検証し、極端に偏った支間割を避けることが望ましい。また、連続高架橋のような場合にはできる限りスパン長を統一、あるいは緩やかに擦り付けることで視覚的連続性を保つようにすることが望ましい。
- ② 桁高と桁下高の比率：一般に、上空を渡る桁には軽快さが求められる。従って、多くの橋脚で薄い桁を支えることが、少ない橋脚で厚い桁を支えるより景観的に好ましい。このことは桁下高が低いほど顕著になる。
- ③ 径間数は偶数よりも奇数のものが景観上好ましいことが多い。※



※径間数が、少ない場合は、一般に奇数径間として、橋梁中央に橋脚を建てないようにすることが多い。これは、水深の深い、水流の激しい河川中央に橋脚を建てないという理由に加えて、橋梁中央の桁下の通路（道路）を封鎖する感があり、これを避けるという理由もある。さらに、偶数径間の橋梁では、視線はどうしても中央の橋脚に集中し、そこで止まってしまう傾向がある。その結果、桁下空間は2分され、線や空間の連続性が希薄になってしまう。橋梁ののびやかな美しさのためにも、偶数径間は避けたい。

上下部工の視覚的なバランス

出典：* 2 3

23. 桁形状・桁裏形状に配慮したか

【解説】

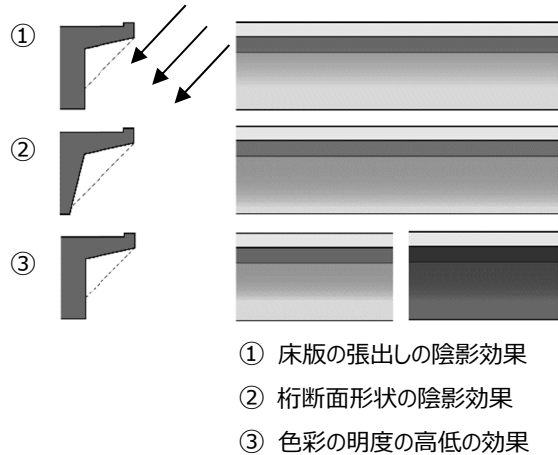
桁の設計にあたっては、桁高を極力抑制するとともに、陰影による効果を勘案して桁が描くラインをすっきりと見せることを基本となる。そのためには、床版の張出しによる陰影効果、桁の断面形状による効果、桁の色彩による効果などを利用する。

床版の張出しによる効果

床版の張出すことは景観向上に大きく寄与する。桁に落ちる影の部分が増え、引き締まった景観が得られる。

断面形状による効果

ウェブを斜めとすることは、側面自体が暗くなり、陰影の効果が多く得られるとともに、威圧感を和らげる効果がある。交差道路などの視点がある場合には特に有効である。



床版の張り出し効果

出典：* 2 3

色彩による効果

明度の高い色彩は膨張し、明度の低い色彩は収縮して見える。塗装が必要な鋼橋の場合、断面形状により生まれる陰影と併せて検討することで、大きな効果が期待できる。

参考 景観に配慮された桁形状の例



斜めウェブの箱桁は桁の底面が狭く見え、軽快感が得られる。



少数主桁橋は、桁高が高くなるが、桁下の見えがシンプルになる。

景観に配慮された桁形状の例

出典：* 2 3



やや重い印象を与えるが、連続感、統一感がとれている。

24. 桁の側面形状に配慮したか

【解説】

桁の側面形状をスッキリ見せる方法として、以下の内容が考えられる。

- ① 型枠の割り付けや PC ケーブルの定着部の後埋め処理をスッキリさせる。
- ② 施工や経済面が許されるならば、よりスッキリした溶接継ぎ手の採用が望ましい。
- ③ ブラケットが、なるべく等間隔に設置できるように計画段階より、上部工のパネル割に配慮する。
- ④ 目立たない吊りピースの形状とおさまりとするか、もしくは脱着式にすることが好ましい。

25. スリムな橋脚形状に配慮したか

【解説】

橋脚の形状は、橋梁全体のバランスに配慮し、できるだけスリムに見せるようにする。具体的方法として、以下の内容が考えられる。

- ① 上部工との関連性の高い形状とする。
- ② リブや面取りにより橋脚に陰影を付ける。
- ③ 横梁（張出し）の目立たない構造とする。



上部工との関連性が高い橋脚形状とすることで、構造物としてのまとまりを生み出している。



リブや面取りにより橋脚に陰影をつけることで、近くから見られても質感が高いデザインとしている。

スリムな橋脚形状

出典：* 3 5

26. 目立たない検査路の設置方法としたか

【解説】

検査路や排水管などの橋梁付属物は、煩雑なイメージを与えやすい。付属物の設置を検討する際には、重要な視点場から見えないようにすることが望ましい。

そのためには、構造設計の初期段階より、付属物の位置や配置方法について検討を行う必要がある。

27. 排水管などによる煩雑感の緩和に配慮したか

【解説】

検査路や排水管などの橋梁添加物は、煩雑なイメージを与えやすい。排水管の設置には、以下の対応策が考えられる。

- ① 鋼製排水溝などを用いた橋面排水とする。
- ② 横引き管を桁の最外面に設置せず外側から視認しにくい位置に引き込む。
- ③ 床版の張出しが十分でなく、高架下の条件が許されるならば、短管で自然放流することも考えられる。
- ④ 排水柵の間隔を 20m にこだわらず、流量計画を行うことで長く設定する。



排水管を床版から僅かに突出させている。排水装置が桁から十分に離れており、桁下空間の問題がない場合は、景観だけでなくコストや維持管理も優れた方向である
排水管の煩雑感の緩和

出典：* 2 3



排水管を桁内へ引き込むことにより橋梁の側面景観をすっきりさせている。

排水管の煩雑感の緩和

出典：* 2 3



排水管を桁の中央部に配置し、目立たないように配慮している。

排水管の煩雑感の緩和

出典：* 3 0

28. 歩道の幅員に配慮した階段、昇降施設の配置形状となっているか

【解説】

階段やスロープなどの昇降施設の位置や形状の決定に際しては、歩道の残存幅員の確保に配慮する。

29. ユニバーサルデザインに配慮したか

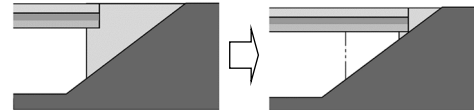
【解説】

橋梁上の歩道や昇降施設は、高齢者や身体障害者に配慮した整備とする。

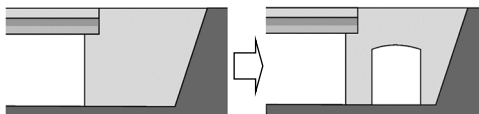
30. 橋台と土工とのおさまりに配慮したか

【解説】

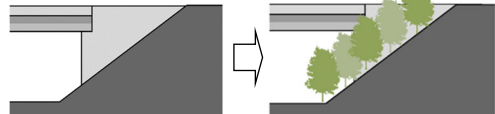
橋台の位置と形式は、周辺環境や種々の条件をふまえた上で、橋台のボリューム感の軽減に十分配慮して決定することが重要である。ボリューム感を抑えるには、コンクリート面の表情を適切に変えることも有効である。



コンパクトな橋台は、土工部とおさまりがよく、桁下空間が開放的になる。



ラーメン橋台とすることで、ボリューム感を減らすことができるが、形態要素が増えて煩雑にならぬよう、造形には注意を要する。



植生基盤を設けて植栽することで、コンクリート面を包み込むのは効果的である（周辺に緑が多い場所では特に有効）

橋台と土工とのおさまり

出典：* 2 3

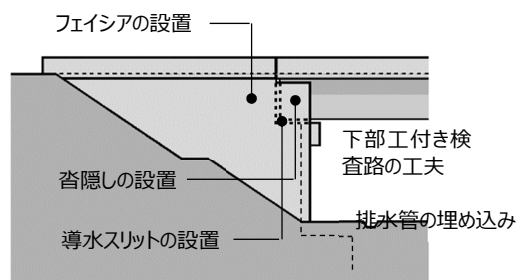
31. 橋台と桁との連続性を確保したか

【解説】

橋台と桁の連続性を確保するためには、橋台にフェイスアを設置し、桁の連続性を強調する。また、外側面（フェイスア）の形状を橋台に配置し、連続性を確保する。

橋台と桁との連続性

出典：* 2 3



32. 橋梁の利用面から橋上広場（アルコーブなど）を設置する場合、上部工と下部工との一体感、橋全体のバランスに配慮したか

【解説】

上部工の断面形状と下部工（橋脚）形状に連続性を持たせ、上下部工の一体感を強調する。

33. 橋梁用防護柵（落下防止柵、投物防止柵など含む）の検討に際しては、眺望性の確保などに配慮したか

【解説】

橋梁用防護柵の形式や形状は、安全性とともに周辺の眺望性に配慮したものとする。歩道橋などでは、強化ガラスなどの素材の活用も考えられる。



ポストレスの鋼製防護柵例

長崎県美術館（長崎県長崎市）出典：* 2



強化ガラスの防護柵例

（神奈川県横浜市）出典：* 2

34. 照明の検討に際しては、連続性や橋梁との一体感などに配慮したか

【解説】

橋梁の照明は、前後の道路との連続性に配慮した配置や光源とし、目立たないシンプルな形状とする。照明の橋梁上の定着部は、地覆のラインを乱す要因となるために、照明の配置には十分な配慮が必要となる。

35. 周辺環境に配慮した橋梁の色彩の選定を行ったか

【解説】

橋梁は、色彩で個性を獲得することを避け、周辺環境と馴染む色彩を選定し、構造物の形態を引き立てる。色彩は、低彩度色を基本とする（マンセル値：彩度 2 以下が望ましい）

周辺環境	都市域	中間域 (田園部)	自然域	
			山間部	海洋部
環境色彩	都市部の色彩は、一般に明るい低彩度色が基調となっている 人工物が主体であり、季節の環境色の変化は少ない	なだらかな地形、草木、河川、空等で構成されている 季節の移ろいに伴い周辺景観色も変化する	地形に起伏があり、変化のある自然環境で構成されている 季節に移り変わりに伴い周辺景観色も大きく変わる	海、空、砂浜など、明るい色調で構成される 季節の移り変わりに伴う周辺景観色の变化は、山間部や田園部ほど大きくない
色彩計画のポイント	都市景観に馴染ませるように明るめの低彩度色を基調とする 近景で見られることが多いので威圧感のある色調は避ける	周辺景観色の中の安定した色を基調とし、低彩度色により融和させる	樹木の幹、土、岩など自然景観の安定した色を基調とし低彩度色により季節変化に配慮する	海や空などの爽やかな色調に馴染む低彩度色を基調とする

周辺環境に配慮した橋梁の色彩

出典：* 3 6（橋梁デザインノート 日本道路協会）

9) 歩道、10) バス停・停車帯、11) 駐輪施設、12) 交差点設計における確認事項

- 歩道、バス停・停車帯、駐輪施設、交差点設計における景観的ポイント

歩道空間はシンプルで利用しやすい空間とする。また、バス停留所や停車帯などを設置する場合は、道路空間の中のおさまりを考え、違和感の無いものとする。

- 歩道、バス停・停車帯、駐輪施設、交差点設計における確認事項
歩道

36. 歩道構造はユニバーサルデザインに配慮した歩道構造になっているか

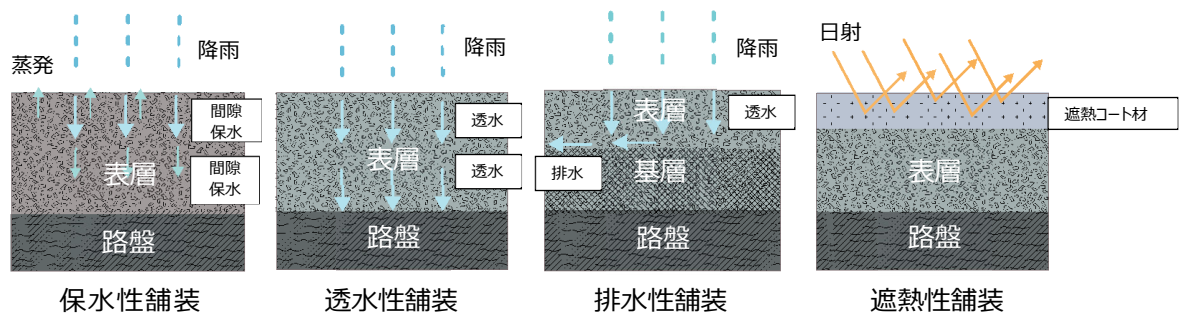
【解説】

歩道構造は、高齢者や身体障害者に配慮したものとする。

37. 環境条件などに配慮した歩道舗装方法、素材となっているか

【解説】

歩道の舗装方式や素材は、歩道の環境条件に相応しい、歩き易いものを用いる。舗装方式としては、排水性舗装（水はねやしびきの緩和や低騒音など）、保水性舗装（路面温度の低下など）、透水性舗装（氾濫の防止、植生、地中生態の改善、地下水の涵養など）、遮熱性舗装（路面温度、夜間の放熱量の低減）などが考えられる。



38. 景観形成の目標像にあった路面デザインとなっているか

【解説】

路面デザインは、それ自体が目立つのではなく、沿道景観や植栽、歩行者の姿が映える色調で、落ち着いた控え目なものとする。材料の選択にあたっては、その空間の景観の重要度を考慮し選定する。景観の重要度が高い場所（区間）では、エージング（経年変化＝年々みずぼらしくなるのではなく、味わいが出てくる）が出てくるような材料を用いる。なお、頻繁に更新するような場所（区間）では、アスファルト舗装にすることも考えられる。

琉球石灰岩によるブロック舗装

琉球石灰岩で統一された歩道は、全体として上品なイメージがあり、植栽などの色彩を引き立てている。



琉球石灰岩によるブロック舗装
龍潭通り（那覇市） 出典：* 2

バス停・停車帯

39. バス停、停車帯としての識別性は確保されているか

【解説】

バス停留所や停車帯などの滞留空間では、歩行空間としての一体性を保持しつつ、ベンチや植栽のしつらえなどによって歩行空間から適度に識別させることが求められる。

40. 歩道空間との連続性、一体感のあるバス停になっているか

【解説】

バス停留所や停車帯などの滞留空間では、歩行空間としての一体性を保持しつつ、ベンチや植栽のしつらえなどによって歩行空間から適度に識別させることが求められる。また、バス停の設置が想定される歩道では、あらかじめバス停分の用地を確保するなどの配慮が求められる。

駐輪施設

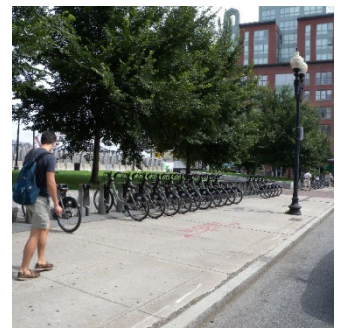
41. 歩道の有効幅員の狭窄を回避した駐輪施設の設置になっているか

【解説】

駐輪施設は、歩道上のデッドスペースや植栽帯の分断箇所を活用して駐輪空間とし、スムーズな走行、歩行を確保するとともに、道路空間をスッキリさせ、道路景観の向上を図ることが求められる。



駐輪施設
(ニューヨーク・ハイライン) 出典：* 2



駐輪施設
(ボストン) 出典：* 2

交差点

42. 交差点の景観的な位置付けに配慮したか

【解説】

平面交差点は、道路が交差する部分であるため、交通の要所であり、景観の要所でもあるが、多くの景観要素が集中し煩雑な印象を与えやすいため、設計にあたっては、沿道の要素も含め、全体の調和に配慮する必要がある。

43. 構造物の集約に配慮したか

【解説】

立体交差点は、視覚的にわかりやすく、シンプルな構造とすることが望ましい。また、効果的な植栽などにより、交通及び景観の要所としての認識が得られやすいように配慮する。さらに、標識・案内板などは、煩雑にならないように統合、整理して、景観的に美しく、シンプルなものとする。



交差点の道路付属物の集約例
(神奈川県横浜市) 出典：* 3 7